臨死体験と文学

井本英一

古代から現代にかけて広く見られる，洞穴，水の流れ，池の複合は，母胎を象徴し，そこで死と再生の儀礼が行われてきたと解釈される。この解釈は正しい。洞穴は，大地の胎の産道を表わし，その中に死者が帰り，同じ洞穴を通って再生するとされた。いっぽう，洞穴は，この世とあの世の間にあるまっ暗な通路で，死者は，この通路を通ってあの世に参入したのだというイメージがあった。この場合，この通路は一方通行ではなく，ときどき，死者は，この通路を引き返して，生者の世界に戻ってきた。このイメージが一般化すると，生者が死者の国である冥界を訪問し，そこから帰還することが，再生儀礼として実修されるようになった。洞穴あるいは洞窟は，出口のない穴であるが，その他に，出口の向こうがわが見えるトンネルのような洞穴がある。

シュメール神話の英雄ギルガメシュは，親友エンキドゥと共に，森の怪物フンババと天の牛を殺した。そのために，エンキドゥは死ぬ運命になった。ギルガメシュは，エンキドゥの葬儀を手厚く行ったが，エンキドゥの死を目のあたりにして，死の恐怖にとりつかれる。彼は，ウトナピシュティム（生命を見た者の意）に会って生と死の秘密を聞き出すために旅に出る。マーシュ（双子）山に着いたとき，人面蠍身（さそり）の蠍人間たちが門を守っていた。ギルガメシュは，蠍人間たちに，ウトナピシュティムの許にゆきたいといった。彼

らはギルガメシュに答えた。この山を通り抜けることはできない。山の中は，12ベール（約120キロ）の暗黒がつづくと。ギルガメシュが12ベールに達したとき，向こうに明るみが現れ，茨が見えたが，それらは紅玉髄の実をつけ，葡萄の房をたわわにし，ラピス・ラズリの葉をつけ，実をつけ，見るに楽しかった。

ギルガメシュは海辺に出た。そこには，酌婦シドゥリが座っていた。彼女は彼の姿を見て門を閉ざした。ギルガメシュは酌婦シドゥリに，ウトナピシュティムの許にいたる道を尋ねた。彼女は答えた。そこに行く術(すべ)はない。昔から，誰もこの海を渡らなかった。シャマシュ（太陽）のみがこの海を渡った。ただ，ギルガメシュよ，ウトナピシュティムの舟師ウルシャナビがいるので，彼と共に，死の水の海を渡れと。ギルガメシュは，舟師ウルシャナビと共に舟に乗った。

ウトナピシュティムは，ギルガメシュに，自分がいかにして不死の生命を与えられ，神々に列せられたかを語った。神々が人間を滅ぼそうとして，大洪水を起こしたとき，ウトナピシュティムは，方舟をつくって生き物を救った。神々は怒ったが，結局は不死の生命を与えられたという。その後７日間，ウトナピシュティムはギルガメシュに試練を課すが，ギルガメシュはこれに耐ええない。ウトナピシュティムは，ギルガメシュを送り帰そうとする。ギルガメシュが舟師ウルシャナビと舟に乗って航海に出ようとした矢先，ウトナピシュティムの妻のとりなしで，深淵の底の薬草を手に入れた。薬草の名は，「老いたる人が若返る」といった。

彼らは20ベール行ってパンを割いた。さらに30ベール行って休息をとった。ギルガメシュは，泉を見つけ，水浴びした。一匹の蛇が薬草を盗んで去った。ギルガメシュは，腰を落として泣いた。彼らは，70ベール行ってウルクの町に帰り着いた（月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店，1996年。叙事詩の成立史などくわしい。氏のアッカド語標準版の日本語訳を参照した）。

『ギルガメシュ叙事詩』に用いられたモチーフを列挙してみよう。ギルガメシュがウトナピシュティムを訪ねる直前に，自分の他我に等しい親友であ

るエンキドゥの死と葬儀がある。マーシュ（双子）山には，蠍人間が門番として門を守っていた。このことは，双子山が，この世とあの世の境であったことを物語る。人面蠍身の生き物は，宮門を守る古代中東の有翼人面牡牛像と同じように，この世とあの世の住人の合成像で，境界の存在の姿であった。双子山は，境界の山としては，一つは生を，一つは死を象徴する山であったと考えられる。あの世には，双子山から120キロつづく暗黒を通り抜けないと達することができない。この暗黒というのは，他のテキストから推理すると，一本の長い洞穴あるいはトンネルである。このトンネルは，山の中腹に穿たれた洞穴である。双子山には，古くは二つの洞穴があったと考えられる。一つは死者があの世に入ってゆく洞穴で，一つは産道と同じように，死者があの世から再生して出てくる洞穴であった。二本の洞穴，トンネルは，一本にまとめられ，両方の用を兼ねるようになったと考えられる。暗黒の洞穴の向こうに明るみが見えたというのは，この洞穴が，奥が行き止まり状態ではなく，トンネル状になっていたことを表わしている。トンネルは，この世とあの世の中間の通路であった。トンネルの向こうに茨が見えたとあるが，それは，くねくねと湾曲した多くの小枝を意味するのであろう。紅玉髄やラピス・ラズリ（瑠璃）の実や葉が，枝にもぶれついていた。この部分は，『仏説無量寿経』や『仏説観無量寿経』に描かれた仏国土の植物を想起させる。ここには，七宝つまり金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲（しゃこ）・瑪瑙（めのう）・珊瑚の樹木があり，あるいは，二宝，三宝，七宝が合成した植物があり，金樹（こんじゅ）に銀葉（ごんよう），華果（けか）がついていたり，銀樹に金葉，華果がついていたりする。ウトナピシュティムの国と，仏教の西方（さいほう）極楽国土は同じような無量寿（永生不死）の楽土であった。

次に海辺が出てくる。ギルガメシュがトンネルを出て見た宝石の植物が生えている場所と海辺が，どのような関係になっているかは判然としない。実際にウトナピシュティムが住んでいるのは，海を隔てた彼方である。海辺には，酌婦シドゥリが座っていた。シドゥリは聖娼であった。死者の魂は，彼女の産道を通って彼女の母胎に帰還し，あらためて産道から再生したのであろう。彼女は門を閉ざしたとあるが，おのれの母胎に入ることを拒否したの

であろう。その代わり，船頭を世話して，ギルガメシュをウトナピシュティムの許に送ろうとする。シドゥリと船頭と宝樹は，これで一体をなしていたのかも知れない。中国で成立した偽経『十王経』には，死者が三途の川を渡るとき，岸にいる脱衣婆（だつえば）に衣服を剝がれ，懸衣翁（けんえおう）がこれを衣領樹（えりょうじゅ）に懸けるというくだりがある。『観無量寿経』によると，仏国土の宝樹には網が懸けられ，真珠がちりばめられているとある。脱衣婆と懸衣翁の元の姿は，境界に立つ男女像，つまり道祖神であったのが，このように変容したのであろう。境界の道祖神は，『古事記』，『日本書紀』に見られる日本神話では別の姿をとって現れる。

山幸彦が，兄海幸彦の鉤を失ってしまい，兄に実物の返還をせまられて，途方にくれて海辺をさまよっているとき，塩土老翁（シホツチノヲヂ）が現れ，マナシカツマ（編み目のない籠）の中に山幸彦を入れ，海神の宮に無事送った。この場合，性も年齢もちがうが，老翁は，『ギルガメシュ叙事詩』の聖娼シドゥリにあたる。彼女は船頭を手配して，ギルガメシュをウトナピシュティムの住む国（海神宮に相当する）に送る。『日本書紀』の一書では，老翁が，もっていた袋から黒い櫛をとり出し，地に投ずると，そこが竹林となったので，その竹で籠を編んで，その中に山幸彦を入れて海に沈めたという。籠で浮木をつくり，山幸彦を海に沈めたともいう。浮木というのは，小舟のことであろうが，竹林といい木材というのは，境界の樹林の表われである。別の一書によれば，山幸彦が，わなにかかった一羽の川雁（かわかり）を解き放ってやった直後に老翁が現れる。老翁は川雁の化身で，恩返しに山幸彦を海神宮に送ってやったのであろう。動物報恩のモチーフが入っているが，新しい形式であろう。

ウトナピシュティムには，「創世記」のノアと同じ大洪水伝説がついている。洪水は，出産のとき母胎から流出する羊水を象徴したものである。羊水の流出後，羊膜の中から新しい生命が誕生する。胎児を包む羊膜は，ノアやウトナピシュティムの方舟にあたる。ノアは，人類をはじめとする，あらゆる生き物の祖となり，ウトナピシュティムは，あらゆる生物を洪水から救った（別の意味では，あらゆる生物を生み出した）功績により，永遠の生命を

与えられた。このようにして不死となったウトナピシュティムは，同じように不死の生命を手に入れたいギルガメシュに対して，7日間の試練を課す。ギルガメシュにとっては，不死の世界に参入できるかどうかの重大な通過儀礼であった。ギルガメシュは，試練に耐えられず，人間世界に帰るようにといわれる。異界を訪問したが，受け入れてもらえず，もとの世界に帰れといわれる話は，重要で，以後の考察でもしばしば現れる。

ギルガメシュは，あの世で受け入れてもらえなかったが，老人から若返る不死の薬草をもらう。この薬草を帰途，蛇に盗まれるが，それは，120キロの道程の途中のことであった。帰途はトンネルにはなっていない。往路と復路が，あらゆる冥界めぐりで，本来は別の路であったことは，いくつかの例が現在でも見られる。

これは，人間は死すべきものだという説明神話の一つであるが，蛇と人間が関わるものを，一，二挙げてみよう。N．ネフスキーが，大正15年，那覇に向かう汽船の中で，宮古島出身の人に昔話を聞いて，書き留めた記録がある。昔，月と太陽は，使いの者に，一つの桶には生命の水である変若水（おちみず），他の桶には死水を入れて，それを担がせて地上に降りさせた。使いは，地上に降りて，休もうと思って，小便をしていると，どこからともなく，一匹の大蛇が現れて，生命の水を浴びてしまった。天の使いは，仕方がないので，死水を人間に浴びせた（『月と不死』岡正雄編，平凡社，1971年，11－15頁）。

洛陽の郊外に，深さの知れない洞穴があった。夫を殺したいと思っていた女が，夫を穴に突き落とした。男は意識を取り戻し，横穴を見つけて進んでゆくと，広々した場所に出た。さらに十余里ゆくと，足の下に塵がつもっていたが，それを口にすると，よい香りがする食物だった。暗い穴を通ってゆくと，一つの町に出た。地下の国なので，太陽も月も星もなかったが，それを加えたくらい明かるかった。この町の住人は，身の丈が三丈もあり，羽でつくった衣服を着ていた。大男のいうまま，このような町を九つ通ったが，最後の町では腹がへった。大男は，彼に羊のひげを引かせた。最初に引くと，真珠が一つ出てきたが，それは大男がとり上げた。次に引いたのもとり上げ

た。最後に引いたものを食べると，空腹が消えた。洛陽に帰り，『博物志』の著者である張華に尋ねたところ，羊はみずちで，最初の真珠を食べると，寿命が大地の寿命と等しくなり，次のを食べると寿命が延びる。最後のは，空腹を満たすだけだということであった（『幽明録・遊仙窟他』前野直彬，尾上兼英他訳，平凡社，1965年，12－14頁）。男は地下の国を訪ねて不死の薬を求めたのではないが，地上の人間は，結局は不老不死を手に入れることはできなかった。

アッカド語標準版『ギルガメシュ叙事詩』は，紀元前12世頃のものといわれる（月本，前掲書，285頁）。中国の東晋から南北朝の宋にかけての詩人陶淵明（365－427）の散文『桃花源記』の中に，『ギルガメシュ叙事詩』に用いられたモチーフが多く見られる。晋の太元年間，武陵に一人の漁夫がいた。ある日，漁夫が谷川をさかのぼってゆくと，目の前に桃の花の林が現れた。林のつきた所に山があり，そこが水源で，洞穴になっていた。漁夫は舟を置いて洞穴の中に入っていった。洞穴は，最初は狭かったが，さらに進むと，目の前がぱっと明るくなり，家や田や池が目に入り，鶏や犬の鳴き声が耳に入ってきた。村人は，漁夫にどこから来たのかと尋ねた。ことの次第を話すと，村人は漁夫を家まで連れて帰り，酒食をふるまった。彼らは，秦の戦乱を避けて，人里はなれたこの地にやってきたといい，今は何という御代（みよ）なのかと尋ねた。彼らは漢の時代があったことも知らず，まして魏や晋のことは知る由もなかった。漁夫は数日をこの地で過ごし，舟で自分の町に帰り，太守に一部終始を報告した。太守は，漁夫に人をつけて，道をたどらせたが，ついにゆきつくことはできなかった（前掲『幽明録・遊仙窟他』100－102頁，竹田晃訳『捜神後記』より。一海知義『陶淵明』岩波新書，1997年は，ユートピア物語とする）。この小説は，晋から南北朝時代に盛行した怪異小説の一つだといえば，それまでであるが，別の見方で解釈してゆきたい。これは，陶淵明の創作であるのか，当時，人口に膾炙していた異郷訪問譚を再話したものであるのか明らかではないが，それは，いずれの場合においても，重要な意味を持っていることが，のちになって明らかになるであろう。

陶淵明の『桃花源記』と似た話が朝鮮にも伝えられている。昔，一人の男が柴刈りをしていたとき，鹿を見つけたので，追っていった。鹿は，ある所にくると，穴の中に入ってしまった。男も穴に入った。穴は少しずつ広くなり，人間の住む村があった。村人たちに聞くと，昔，乱を避けて山奥に入り，村を建設したので，現世とは交通する必要も感じないという。そこに入る入口を見つけるのは，恐らく無理だといわれている（依田千百子「異界としての山──朝鮮の神話伝説から──」『説話　異界としての山』説話・伝承学会編，1997年，205頁。崔仁鶴『朝鮮伝説集』日本放送出版協会，1977年，256－257頁）。この尚州五福洞伝説には，『桃花源記』に見られる川のモチーフはない。柴刈りの男をトンネルを通って異界に導いた鹿は，異界の祖先霊の化身であると考えられる。このような隠れ里には，共通した成立の動機があったのであろう。

ところで，武陵（湖南省）の漁夫は，自ら舟で川をさかのぼり，水源である洞穴まで達する。桃花の樹林は，洞穴に達するまでにある。『ギルガメシュ叙事詩』では，宝樹は，トンネルを出てから見られ，その先に海があり，ギルガメシュは舟に乗って不死の国を目指す。漁夫は洞穴を出て，広いユートピアに入る。彼は誰からも拒否されなかったが，自発的に自分の町に帰る。ギルガメシュのように，いちど手に入れた不死の薬草を盗まれるというモチーフはないが，秦の時代の難民の住むユートピアは，死者の国であり，不老不死の国でもある。そこから帰還した漁夫は，不老のエネルギーを与えられるが，死すべき人間の世界に帰ったので，二度とユートピアを訪ねることはできなかった。洞穴が，川をさかのぼった水源のある山にあることは，『ギルガメシュ叙事詩』にある双子山の山腹の洞穴と同じである。古代西アジアに伝承された異界訪問譚は，アレクサンダー伝説の中にも形を変えてとり入れられている。

アレクサンダー大王は軍勢を引き連れてある町に着く。町は庭園や牧場や宮殿で満たされ，光り輝いていた。大王は馬を降り，田園詩人がうたう生命の水の源泉を訪ねたいと思う。彼は屈強の兵士と40日分以上の食糧をたずさ

えて出発した。案内役としてヒズルを連れていった。大王は，暗闇の中でも，水面の輝きで，昼間の太陽のように光る印章を二個もっていた。一個をヒズルに与え，生命の水に案内するように命じた。3日目になって，暗黒の中で，道が二つに分かれ，アレクサンダー大王は，ヒズルを見失ってしまった。ヒズルは，生命の水の水源に着き，喜んで水浴し，その水を飲み，休息し，急いで地上に戻った。大王は，死の水の流れる道をたどり，死すべき運命にあることを知らされ，泣きながら戻る（井本英一・岡本健一・金澤良樹『アレクサンダー大王99の謎』サンポウジャーナル，1977年）。

ヒズルとは，緑の人の意味で，『コーラン』によると，ムーサー（モーセ）が召し使いと旅に出て，目的地であるマジュマア・アル・バハレインに着いたとき，神の召し使いであるヒズルに出会ったという（18.60－81）。マジュマア・アル・バハレインとは，「二つの海（ペルシア海とローマ海）の合流点」のことであると説明されるが，二つの川の合流点と考えると，アレクサンダー伝説と比較できる。ヒズルは，川の合流点で大王と別れ別れになる。『コーラン』では，旅の食糧としてムーサーがたずさえていた干し魚が川に逃げ，泳いで去ったとある（18.63）。

エチオピア語版の『アレクサンダー伝説』では，ヒズルが大王を見失って，生命の水の水源に着いたとき，食料としてたずさえていた干し魚を水中に投ずると，魚は生命をとり戻して泳ぎ去ったとなっている。ヒズルは船頭にあたり，アレクサンダーは船頭に案内されるギルガメシュである。『コーラン』では，ヒズルに案内されるのはムーサーに変わっているし，干し魚が水中に逃げるのも，ムーサーのことになっている。ギルガメシュもアレクサンダーも，永遠の生命を手に入れることができないで，泣きながら帰還する。『アレクサンダー伝説』では，暗黒の道は地下の川を指しており，生命の水の川と死の水の川が途中で合流している。『コーラン』もこの伝承に立っている。ヒズルは，薬草の精を表わすのであろう。日本神話の塩土老翁にあたる。『アレクサンダー伝説』には，ヒズルの個所ではないが，山幸彦と同じように，海中探検をするモチーフがある（井本・岡本・金澤，前掲書）。

エデンの園についても再考する必要がある。「創世記」によれば，園には，生命の木と善悪を知る木がある。その間を一本の川が流れ，それはさらに四本の川に分かれて流れる。「創世記」には，四本の川の名前がある。四本の川は，神話上の川であって，ナイル，ユーフラテス，チグリス，インダスなどの実在の川を指したものではない。エヴァは，生命の木の実ではなく，死の木である善悪を知る木の実をアダムに食べさせた。そのために，二人はエデンの園に住めなくなり，楽園を去ることになった。果実は，最初，エヴァが蛇にそそのかされて食べた。エヴァ自身，語源的には，生命（ハッワー）のことで，アラビア語の生命（ハィヤー）と同じ語で，それは蛇とも共通する語であった。ギルガメシュは手に入れた不死の薬草を蛇に盗まれて，死すべき運命となる。アダムは，エヴァ（蛇）に死の果実を与えられ，死すべき運命となる。この場合，蛇であったエヴァも，死すべき運命になり，蛇自体は，不死となる。アダムは，ギルガメシュのように，不死を求めてエデンを訪れたとはなっていない。アダムを楽園から追放する神は，ギルガメシュを楽園から帰還させるウトナピシュティムにあたる。トンネルや洞穴のモチーフはない。しかし，人間の死の起源説話としての共通点をもっている。

『ギルガメシュ叙事詩』に出る双子山は，太陽だけが越えてゆくことができるとされている。ハッティ語のテキストにも，「太陽の地下なる大道」という表現が見られる。双子山は，一か所にあり，太陽がその山を越えてゆく。山の中腹にトンネルがあるが，理屈の上からすれば，太陽は昼間は，東から西に天空を通過し，夜は，西から東に，トンネルの中を通過することになる。古代中国には，太陽が昇る東方には扶桑の木があり，太陽が沈む西方には若木があった。『説文』六上には，「扶桑(じゃくぼく)若木なり」とあり，若木のことである（白川静『字統』平凡社，1984年，542頁）。ここから，扶桑と若木は，元来は一つで，世界の中央に一本生えていた巨大な世界樹であったという説がある。太陽が毎日，下の枝から出て最高の枝まで登り，また降りてくると考えられた。それがやがて東と西に分かれ，別々の木になったとする（小南一郎『中国の神話と物語り』岩波書店，1984年，52－53頁）。二本の桑の木は，

エデンの園の二本の木と同じように，陰陽・生死を象徴する，一にして二になるものであった。

日本神話では，次のようになっている。太陽神天照大神が，梭(ひ)で身を傷つけて死に，天の岩戸に隠れたとき，八百万の神々が天の安の河原に会して相談した。神々は神木を根こそぎにして，その枝に鏡と玉と幣をとりつけ，岩戸の前に立てた。天宇受売命が桶を伏せて，踏みならして踊った。アメノウズメは，胸や腰を露わにして踊ったので，神々は大笑いした。大神は怪んで，岩戸を少し開けて外の様子をたずねた。ウズメは，大神よりもっと貴い神がきたので喜んでいると答えた。その間，大神は，自分に向けられた鏡に映った姿を見て，ますます怪しみ，戸から少し出たところを，手力男(タヂカラヲ)が大神の手をとって引き出した。この神話は，冬至の前後に行われた再生儀礼で，遊離しようとする魂を天子の体に鎮めようとする鎮魂祭の由来を語る神話であった。

この神話では，『ギルガメシュ叙事詩』に出る聖娼あるいは酌婦シドゥリにあたるアメノウズメが，トンネルの前の聖樹の所で踊る。榊(さかき)は，栄える木，目出度い木とされるが，境の木の意味であろう。そこに神霊が憑依するのである。岩戸の前には，天の安の河が流れているが，船頭や舟は見られない。しかし，伊弉諾(イザナキ)・伊弉冉(イザナミ)二神の国生みのとき，最初の子蛭児(ひるこ)は，三歳になっても足が立たなかったので，天磐樟船(あまのいわくすぶね)に乗せて流し捨てた（『日本書紀』）。ひるこは，天照大神をひるめといったのに対する男性呼称で，大神の夫であり男の子である太陽神である。太陽神は，エジプトと同じように，舟に乗って天空を渡ったのであろう。

シュメール・アッカドと古代中国と古代日本には，太陽と洞穴と海の複合が見られるが，中国と日本の神話には，不死を求めてウトナピシュティムを訪れるギルガメシュにあたる者がいない。舟に乗って天空を渡る太陽が，恐らくは，これにあたるのであろう。ただ，天孫山幸彦は，天孫ニニギノミコトの子であり，太陽神の子であるので，ひるこである。山幸彦が海辺にいる塩土老翁に入れられた目無籠(まなしかご)は，無間勝間之小船(まなしかつまのおぶね)つまり船であるが，隙き間のない籠であるので，トンネルに等しい。この物語にも太陽と洞穴と海の複

合が見られる。ウトナピシュティムは，海神宮の海神である。山幸彦の海神宮訪問譚は，死の起源を物語るものではないが，トンネルに相当する目無籠や海の彼方に楽園がある点は，他の物語と同じである。

ヨルダン川の水源は，ギリシア神話の人面山羊軀のパン神の名をつけたパンの洞穴で，そこから噴出する水が，最初から川を形成している。洞穴の向こうに何があるか分からないが，異界があると考えられたであろう。エルサレムの城の東南の崖の下に，処女マリアの泉と呼ばれる泉がある。泉は斜面の中腹にある。そばを道路が走っていて，10メートルくらいの階段を降りると，人間の背丈より少し大きいぐらいの高さの洞穴が口を開き，奥から清水が湧き出している。洞穴の奥500メートルの所にあるヒゼキアの泉に流れはつながっていて，アラブの子供や米人観光客が，膝まで水につかって，中に入ってゆく（村松剛『ユダヤ人』中公新書，1963年，112－113頁）。川の流れは，洞穴を水源としたり，洞穴の奥の泉を水源とすることがわかる。マリアの泉にも，既成，未完成合わせて数本の人工のトンネルが，通じていることが知られている（上掲書，114頁）。

イランのベヒスタンには，旧石器時代の洞穴と，ペルシア帝国のダリウス大王の碑文と，山麓から湧出する多量の地下水と，その水をたたえる人工池がある。ベヒスタンというのは，古代ペルシア語のバガスターナの近代語の一つであるベギスターンをローマ字で写した形で，もう一つの近代語では，ビーソトゥーンになる。ビーソトゥーンとは，柱のない場所くらいの意味である。周辺には，古代の石柱の破片や柱頭が散らばっていた。古代ペルシア語バガスターナとは，神（ミトラ＝ミスラ）を祭る場所の意で，トンネルの向こうにミスラの楽園のあることを物語っている。ベヒスタンからさらに西方，ケルマンシャーに向かうと，その手前５キロほどの場所に，ササン朝ペルシアの聖地ターケ・ボスターン（花園の入口）がある。この地には，ササン朝の帝王たちによってつくられた，大小二つの洞穴と浮き彫りが，岩山の麓にあり，そばに多量の地下水が噴出し，巨大な人工池に常時水を満たしている。

洞穴，流水，池，花園の複合は，エデンの園である。ササン朝時代，現在のイラクのティグリス川左岸にあった首都クテシフォンから，帝王の遺骸がここに運ばれて，殯が行われたらしい。新帝の即位礼もここで行われた。この洞穴は，死者が帰ってゆき，再生して出てくる所であった。それは，花咲き乱れる極楽の入口であったといえる。イスラム時代になってからは，人々は新年あるいは小正月にこの地を訪れ，帰還することによって，異郷訪問を果たし，よみがえりをした。ベヒスタンの祭神ミスラ（中期ペルシア＝パルティア語はミフルで，その愛称ミフラクは，弥勒と音写される。梵語マーイトレーヤの音写ではない）は，男神アフラマズダーと女神アナーヒター，つまり天父太陽神と地母豊穣神の子で，それ自体，太陽神の子ひるこなのである。ミスラは，アナーヒターと母子神の関係にあり，洞穴，水の複合は，太陽神ミスラの誕生を象徴する。

エデンの園から流れ出る川の水源には，元来，ヨルダン川の水源のパンの洞穴にあたる洞穴があったと考えてよい（W．R．スミス『セム族の宗教』前編，永橋卓介訳，岩波文庫によると同じ地点に，古代イスラエルの大聖所があった)。アダムはギルガメシュで，永遠の生命を手に入れることができないので，楽園を去るが，ここには舟の表象はない。蛇は，その代わりに永遠の生命を得るが，神に呪われる。エバは聖娼シドゥリで，アナーヒターにあたる。エバとアダムは，母子神の関係にあったことがうかがえる。二人の上にある神は，異教時代の太陽神であった。エデンの園の川辺に立つエバあるいはアダムは，シドゥリや塩土老翁を想起させる。山麓の水辺に現れる山の神は，『十王経』に見られる脱衣婆や懸衣翁のように，老人であったり，ミスラのように，童翁神であったり，アダムやエバのように，青年であったりする。洞穴の傍には，男女の像が彫られる場合があった。

12世紀のイランの叙事詩人であるニザーミーの『ホスローとシーリーン』（岡田恵美子訳，平凡社，1977年）は，この伝承を伝えている。工匠ファルハードは，ホスロー王の妃シーリーンに恋する。王は，妃への愛の証として，ビーソトゥーン（ベヒスタン）の山にトンネルを掘れと命ずる。ファルハー

ドは，まず岸壁に，シーリーンの姿と，馬に跨った王の姿を彫った。それが終わると，ファルハードは，岩を穿って洞穴を掘り始めた。シーリーンはファルハードを訪ね，杯に乳を満たして彼に渡した。彼は酌人シーリーンから杯を受けとってそれを飲み干した。シーリーンは，帰途につくが，馬もろともに崩れ落ちようとする。ファルハードは，シーリーンを肩に担ぎ，城に運んだ。彼は山に戻り，再び仕事を始めた。王は，使いの者に，シーリーンが死んだという偽りの報せを伝えさせた。ファルハードはこの報せを聞き，山頂から身を投じて死んだ。彼がもっていたつるはしの柄が地面に落ちると，そこからザクロの若い木が成長し，多くの実をつけたという（161－191頁）。

王妃シーリーンは，トンネルの前にいる酌婦シドゥリにあたり，死すべき運命にあるファルハードは，ギルガメシュにあたる。洞穴の前に，ザクロの木が立っていたという伝承が，物語化して語られる。ここでは，洞穴の向こうに，ギルガメシュが訪れたウトナピシュティムの楽園があることは考えられないが，桃源郷を含めて，山の楽園が，山の洞穴や木の洞穴をくぐりぬけた向こう側に開けていたり，人の知らぬ渓流を溯行した彼方に発見されたり（川崎寿彦『楽園と庭』中公新書，1984年，6頁），トンネルが山の中腹にあり，先の出口に楽園があった（H．ガスター『世界最古の物語』矢島文夫訳，社会思想社，1973年，66頁以下）。

琉球では，かつての女神職で，軍の先頭に立ち，死んでは守護神となった君南風（きみはえ）の葬式のとき，その遺骸は，崖の中腹に掘られた石屋口とか金比屋口という洞穴を通って，向こう側の精霊の国にゆくと考えられた（伊波普猷『をなり神の島』1，平凡社，1973年，37－40頁）。君南風がゆく，洞穴の向こうには，楽園があった。楽園は，ギルガメシュが訪ねていった楽園と同じ，不老不死の国であった。

楽園や極楽ではなく，死後，地獄に堕ちて帰還した話がある。三井寺に浄照という僧がいた。まだ出家しない子供のころ，地蔵菩薩の像を刻んで，古寺の仏壇のそばに置き，子供たちと遊び戯れていた。その後出家して浄照と呼ばれたが，30歳で急死した。二人のたけだけしい者が現れ，浄照を捕えて

黒山の麓に至った。そこに大きな穴があった。二人の者は，浄照を穴に押し込んだ。穴を堕ちてゆくと，閻魔王庁に至った。そのとき，一人の小僧が現れて，浄照にいうには，自分は，かつて浄照が彫った地蔵菩薩であると。浄照は涙を流して小僧を礼拝した。小僧は，閻魔大王にとりなしてくれたので，生き返った（『今昔物語集』巻第17，第19）。

洞穴は，横穴ばかりではなく，竪穴もあった。松村，前掲書にあるヒゼキアのトンネルは，ヒゼキアの泉と湧泉の間に設けられているが，トンネルの途中で，発見者ウォレンに因んだウォレンの竪穴が垂直につながっている。竪穴は二つあり，一つはヒゼキアのトンネルにつながることがなく，途中で止まったままになっている。この施設は，町が包囲されても，住民が城壁の外側にある隠れた泉，ギホンの泉から水を引くことができるようにつくられた水道施設であるとウォレンらは考えている（高橋正男『イェルサレム』文藝春秋，1996年，117－118頁）。これらの横穴や竪穴は，実用的あるいは儀礼用の水を汲む水道である一方，神殿に通じる地下道でもあったと考えられる。中国北京の故宮に通じる道の一つに地下道があるが，楽園への通路であった。二つの泉がトンネルでつながれ，さらに垂直の竪穴でつながれているが，アレクサンダー伝説の，生命の水と死の水の水源に至る地下道のようなものであった。

浅井了意『東海道名所記』1（朝倉治彦校注，平凡社，1979年）にいう。鎌倉の江嶋（えのしま）の岸に大きな岩穴があり，松明をともして奥ふかく進むと，一丁半で行き止まりになり，龍神の住み処の跡だという。これが有名な弁才天の洞穴であるが，校注者の引く『鎌倉物語』巻二によると，洞穴は二筋にわかれ，右はやがて行き止まりになるとある（87－88頁）。江ノ島の洞穴は，二筋になっているが，生と死を象徴するのではなく，龍神と弁才天という男女神を象徴する，水のしたたり流れる水道になっている。江ノ島の弁才天の伝承は，人間の死の起源を物語ったり，蛇（龍）の不死の起源を説明しない。アダムとエバの楽園の面影もない。あるのは，女神と龍と水流のある洞穴である。弁才天も龍も水の神であるが，エデンの園の伝承では，蛇（龍）が不

死を手に入れ，女性のエバが死を得たことになるが，江ノ島の信仰の対象は，女神弁才天である。

明治６年（1873）に，75文字の銘文を彫った鉄製の太刀を出土したことで有名な，熊本県玉名郡菊水町にある前方後円墳である船山古墳のそばで，昭和48年（1973）ごろ発見されたトンカラリンの遺跡について述べておきたい。この遺跡は，最初，人工の20メートルの洞穴で始まり，そのあと，38メートルの自然の洞穴がつづき，地表に出て60メートルゆくと，さらに24メートルの自然の洞穴に入る。さらに，地表に出て60メートルゆくと，50メートルの人工の洞穴がある。地表に出て，さらに60メートルゆくと，94メートルの人工の洞穴がある（金思燁「古代朝鮮語と日本語」『人間と文化』８号，三愛会，1977年）。

二番目の自然の洞穴は，直角に屈折している。これらの，人工と自然の洞穴の連続は，生と死を象徴する通路で，船山古墳を楽園と見立てる人々によって造成されたのであろう。ここでは，楽園に往く道と，楽園から還る道は，別になっている。古墳は，菊池川左岸の台地にある古墳群の一つであるが，当時の水流と洞穴の関係が，どのようであったのか，知る必要がある。いずれにしても，台地の中腹に開けられた洞穴を入ってゆき，祖先の眠る楽園を訪れたのであった。当時のことであるが，最初，二つの自然の洞穴があり，その間隔は60メートルあった。のちになって，二つの自然の洞穴に人工の洞穴を足していったのであろう。上流から菊池川の水を引いたとも考えられないし，洞穴全体の水源も存在しない。洞穴と洞穴を結ぶ60メートルの通路は，水を流すことができない。昼間にこれらの洞穴の儀礼に参加する者は，暗黒と光明の中を交互に通過したであろう。夜間に参加する者も，暗黒と夜光の中を交互に進んだであろう。いずれの場合も，繰り返し暗黒と光明が出現することに意義があった。

中央アフリカのクバ王国には，ンカーンという少年のイニシエーション（儀礼）があった。現在は廃れかけているが，かつては，大地に70メートルから300メートルのトンネルを掘った。トンネルは，大地に３メートルほど

のトレンチを掘り，天井に横木を渡し，土で覆ってつくった。現在は縮約化され，トンネルの部分は，高さ2.5メートル，幅５メートル，奥行き３メートルの森の植物をびっしりと植え込んだものに置き換えられている。

その後ろに死体を安置した仮小屋がある。儀礼を受ける５，６歳の男の子は，全裸で植え込みの真ん中のトンネルをくぐらされる。それから，仮小屋の莚が上げられ，異臭を漂わせる死体と対面させられる。男の子は，死体と対面したあと，別の出口から解放される。この儀礼は，大地の産道を通って生まれ出ることを表象するとする（渡辺公三「穴と蟻塚　アフリカにおける大地＝子宮のイメージ」『DOLMEN』１号，1989年，153－154頁）。少年は，死者と対面したあと，再びこの世に帰還し，再生する。かつては，トンネルにはある程度水が流れていた。少年は出口で，体じゅうを泥だらけにして，女の仮面をつけた男の股をくぐって出るからである（前掲書，157頁）。

森林あるいはサバンナ植物とは縁のないイヌイット（エスキモー）の儀礼は，本質は同じでも，かなりちがった表われ方をしている。彼らによると，死んだアザラシ，セイウチ，クジラなどの魂は，膀胱に宿るとされる。そこで，狩猟したこれらの動物の膀胱は大切に保存され，祭りのあと，海に戻される。そうすれば，これらの膀胱は，再び動物に生まれかわり，人々に狩猟されて，彼らに食糧を供給する。イヌイットにとっては，これらの動物は，神であり，祖先獣であったと思われる。

祭りは，年に１回，12月（ときに１月）に行われる。その部屋は半地下式になっていて，床の下には大きな円い地下室があり，そこからトンネルが伸び，部屋の床に開けられた穴に通じる。半地下室の天井には穴が開いていて，明かり取りと煙出しの役目を果たす。この部屋には，未婚の男たちが，常時寝泊まりしている。人々は，そこに１年分の膀胱を持ち寄り，それを膨らませて前後に揺さぶる。祭りのあと，これらの膀胱を海面にもってゆき，氷の穴から海に投入する（Ｊ．Ｇ．フレイザー『金枝篇』第５部『穀物と野生動物の霊魂』第２巻，ロンドン，1912年，247－249頁）。

イヌイットの半地下室は，彼らの原初の家屋の名残であろう。厳寒中でも，

地下の温度は一定しているので，移動中の，氷のブロックでつくった家よりは，ずっと温かい。床の穴からトンネルを降りると，円い地下室がある。円い地下室には，定着したイヌイットの死者（ことに始祖）を葬ったと考えられる。この部屋は，祖先（たち）の部屋である。この部屋は，キリスト教大聖堂の地下聖堂クリプトにあたり，クリプトには，キリスト教の聖者や会堂建立にゆかりのある人を埋葬している。ここには，地下の川がある。イェルサレムにある岩のドームの地下には，広い空間があり，そこからさらに下に降りると，地下を流れる川がある。古くは，至聖所とされた所である。ところで，イヌイットの上の半地下の部屋は，子孫である生者の部屋で，地上からは階段を伝って降りる。この部屋は一種の若者宿になっていて，彼らは，下の部屋にいる祖先と共同生活をすることにより，密儀に参入したのであろう。年１回の年末の祭りには，膀胱を膨らませて，海獣たちの再生儀礼を行った。若者たちは，恐らくは，地下の部屋に秘密に導かれ，祖先の霊力に触れ，上の部屋に戻ってくるのであろう。下の部屋は，地下水面上にあるため，場合によっては，床は水浸しになる時季もあるだろう。トンネルは傾斜しているので，水が流れるということはない。上の部屋の床の穴のそばには，天井を支える柱の一つがあるので，上の部屋がエデンの園に変化している。

しかし，若者のイニシエーションは，下の部屋に降りて祖先と接して部屋の秘密を学び，上の部屋に戻るので，下の部屋がエデンの園である。華北では，12月23日のかまどの神の祭りのとき，神像をおんどるの中で焼き，まっ暗な床下の煙道を通らせて，天に送り帰す（永尾龍造『支那の民俗』磯部甲陽堂，1927年，185－186頁）。

アラビアの聖都メッカにあるカアバ神殿は，イスラム教徒なら，一生に一度は巡礼する義務がある。カアバ神殿は，地上２メートルほどの高さに床があるので，中に入るには，移動式階段をつけて昇らなければならない。四角い床の四方は，高さ10メートルほどの石壁で囲まれ，四角い天井がついている。天井の隅に，床から梯子が立てられ，天井につけてある上げ蓋を上げて，陸屋根の上に出ることができる。これが，屋根に開けられた穴である。

床と天井の間には，３本の木の柱が立てられ，天井を支えている。床の中央に，穴がある。マホメットがイスラム教を創始した以前の異教時代から，カアバ神殿は，異教の聖所として存在した。当時は，穴の中に，フバル神の偶像が安置してあった。フバル神は，メッカのアラビア人部族の祖先神であった。地上２メートルの高さに突出し，上部中央にくぼみ（穴）のある岩は，へそ石と呼ばれ，古くは，へそ石の下には，祖先が埋葬されていると信じられていた。カアバ神殿は，真夏は炎熱地獄の中にあるが，家屋の構造は，太古の地下住居が，地上に現れた形式である。カアバ神殿とイヌイットの半地下室は，同一構造であるということができる。カアバ神殿では，地下への出入口にあたる床の中央のそばには，３本の柱が立っている。初期イスラム時代には，カアバ神殿の周りには，数多くのイスラム教聖者の墓があったが，やがて整理されて，とり払われた。床にある穴の下にはトンネルはないが，神殿の部屋と地下の死者の国の構造は，異教時代にはあった。しかし，異教時代から，上の部屋自体は生者の部屋ではなくなり，神の家と考えられた。

カアバ神殿の横に，ザムザム井という井戸がある。ザムザムというのは，井戸の底の水が立てる擬音である。井戸は取水口が二つあり，一つは男性用，一つは女性用である。イスラムの教義に従って，男女は別々の取水口を使うというのが，今の解釈である。井戸の水は，太陰暦12月８日から11日の４日間，世界各地から巡礼にきた，200万人以上の人が汲んでも涸れることはない。アラファート山の麓に湧出する多量の水は，地下に埋設した素焼きの導管の中を流れて，メッカ市に送られる。途中，カアバ神殿を横切るのであるが，ザムザム井が地下導管とつながっているのである。カアバ神殿と聖山アラファート山は，下流にあるメッカ市にとっては異界であるが，トンネルで結ばれている。

カアバ神殿は，涸れ川の川床上の，しかも上下，周囲の川床より低い位置に建っているので，何年に１回かの，大きな集中豪雨で洪水になったとき，神殿は水中に立った形になる。この姿は，洪水が引いても，当分そのままであるといわれている。水中に立つカアバ神殿は，大洪水の中を漂流し，アラ

ラテ山頂に漂着したノアの方舟と同じ複合である。ノアの方舟の複合にはトンネルはないが，双子山であるアララテ山（現実のアララト山は双子山で，アルメニア，トルコ，イラン三国が交わる地域のトルコがわにある。現在のアルメニア領内にはないが，アルメニア人の聖山である）がある。双子山は，ギルガメシュの時代からあるので，山麓には，二つの泉が湧き出ていたと考えてもよい。二つの井戸水は，男性と女性に分かれる前は，生命の水と死の水を象表した。二つの井戸水は，日本にもある。

奈良東大寺の二月堂は，お水取りで親しまれる修二会（しゅにえ）で名高い。本尊の大観音（おおがんのん）は，山の斜面に頭を出している岩座の上に立つ。岩座を中心に，四角い密閉された部屋を建て，至聖所とする。この内々陣床面は，へそ石といわれる岩座の上につくられている。この構造は，メッカのカアバ神殿の床と同じものである。カアバの床のまん中には穴が開いていて，フバル神の偶像が入っていたが，二月堂の床の中央には，岩座の上に，祭壇が設けられ，その上に七尺の金銅の大観音像が立っている。祭壇（須弥壇）の上に立つ大観音（聖観音）の後ろには，秘仏十一面観音（小観音）が厨子に安置されている。カアバ神殿のザムザム井にあたる井戸は，二月堂下にある閼伽井屋（あかいや）の中にある。井戸は二つある。一つは滾々と地下水が湧き出る井泉であり，他は砂を敷きつめた涸れ井泉である。この閼伽井は若狭井とも呼ばれる。

二月堂で３月12日（旧２月12日）に行われるお水取りの10日前にあたる３月２日に，若狭国（福井県）小浜市にある神宮寺（古くは，若狭彦神社といっしょに行った）でお水送りの行事がある。遠敷川（おしきがわ）の上流の音無川（おとなしがわ）にある白石神社で午前中にまず神事があり，午後，神宮寺で神事をしたあと，参加した大衆は，松明を手に川をさかのぼる。最後に，神宮寺の住職によってお水送りが行われる。伝承によると，二月堂の真北にある音無川から，水は地下（の導管）を通って閼伽井に達するという。導管は，須弥壇の下に達するのではないが，上来見てきた諸例と同じ部類に属するものである。本堂と閼伽井屋の間には，良弁杉（ろうべん）が立つ。この杉の木は，エデンの園にあった二本の木のうちの一本にあたり，閼伽井の生命の水に対する生命の木である。

地下を走る目に見えない水脈や地脈は，中国や韓国で古くから信じられた風水思想の中心的な概念である。風は地気のことで，水は地下水を表わし，いずれも，地下のトンネルを走っているとされる。風水信仰は，古くは都城の占定に関わった。現在も，居宅や墓の占定には欠かせない。韓国では，墓は水脈の真上にあるのは良くない（野崎充彦『韓国の風水師たち』人文書院，1994年，71頁）。東大寺２月堂の内陣の下に井戸があるのではなく，堂の前面，階段の下の閼伽井堂にある。メッカのカアバ神殿のザムザム泉も，神殿の真下にはなく，神殿のそばにあり，水脈は神殿の下を流れない。おそらく，メッカの水脈は，風水思想（気を蔵し，水を得るという観念）が概念化しないままの土俗であろうと考えられる。

韓国では，日帝断脈説が信じられている。朝鮮総督府が，朝鮮人民の指導的人材が生まれるのを阻止するため，鉄道や道路を敷設したり，大きな鉄柱を地中深く打ち込んだりして，気脈を断ったというのがそれである（詳しくは，野崎，前掲書，140－202頁）。水脈や地脈を断つことによって，国土と人材と豊穣性を涸渇させるという思想は，秦の始皇帝の将軍蒙恬（もうてん）の故事にもある。始皇帝が天下を統一すると，蒙恬は30万の兵を率いて，夷狄を逐いはらい，甘粛省の臨洮（りんとう）から遼東にいたる一万余里にわたって長城を築いた。始皇帝は，恬ばかりでなく，弟の毅（き）をも信任して側近においた。始皇帝は天下を巡幸したが，蒙恬は山を掘りくずし，谷を埋めて道をひらいた。

始皇帝が薨ずると，丞相李斯（りし）と宦官趙高（ちょうこう）は，末子胡亥を太子に立て，ざん言して蒙兄弟を獄につないだ。胡亥は蒙毅に使者をたて，これを殺した。さらに胡亥は，蒙恬に使者を送り，法を執行させた。恬は，自分の罪は，死に値する。一万余里の長城を築くとき，地脈を絶ち切らないではすまなかったろう。それが自分の罪だといって，毒を仰いで自殺した（『史記』（中）蒙恬列伝，第28，野口定雄訳，中国古典文学大系11，平凡社，1969年，375－378頁）。司馬遷は最後に評言を加えていう。自分は，北辺にいって，蒙恬が築いた長城と道を見たが，それは人民の労苦をかえりみない事業であった。庶民の和を修めることにも務めず，始皇の意におもねって，土木事業を興した

のだ。兄弟が誅を受けたのも当然ではないか。地脈を絶ち切った罪などでは全くないと。

紀元前3世紀の始皇帝と前2世紀の司馬遷の間は，100年しか開いていないが，前漢の司馬遷は，後漢の王充（27－100）の『論衡』の論理を振りまわしている。蒙恬はしかし，自ら地脈を切断したので，自らの運勢と結果論的には，秦国の運勢とを切断したと信じて，死についたのであった。中国や韓国の風水信仰における地脈や水脈は，龍脈と総称されるもので，龍脈を掘りあてた井戸の水は，龍水と呼ばれ，生命の水として尊重された。特定の神殿や廟に附属する井戸には，龍脈が通じていて，東大寺の二月堂と閼伽井のような関係にあったであろう。龍水は，正月に龍卵を汲むという年中行事として『朝鮮歳時記』などに残っている。龍卵は，鶏卵をもってこれに代える。卵の再生，豊饒の力を象徴するのである。龍は頭部が鶏に似てるので，同一視した。

『ギルガメシュ叙事詩』では，ギルガメシュが，ウトナピシュティムの国からトンネルを通って現し世に戻る途中，水浴びしたとき，蛇に不死の薬草を奪われた。エデンの園の記述には，水源の洞穴やトンネルは見えないが，復元できることは説明した。蛇は水源にいて，エバを誘惑したのであろう。大寺院の本堂大屋根の天水を受ける青銅の天水受け容器には，龍の頭がついており，その口から，余分の水を吐き出す。インドでは，手足のないヴリトラ（蛇）は，山にわだかまっているのを，インドラに殺され，インドラは山腹を割いて水を流出せしめた。ヴリトラは，山腹の水源の洞穴を塞ぐ蛇であり，豊饒の源泉でもあった。インドラに退治される敵として，悪魔にされている（『リグ・ヴェーダ讃歌』辻直四郎訳，岩波文庫，1970年，150－153頁）。

古代インドでは，山の中腹に隠れた洞穴があり，そこを豊饒の象徴である蛇が守っていると考えられた。インドラは，そこを割いて水を流出させた。蛇が守る洞穴の向こうに何があるかについては，言及しない。インドラは，蛇を寸断して水に流す。蛇は寸断され，一つ一つの断片から，それぞれの蛇が再生すると考えられたのであろう。一粒の穀物から，多くの穀物を収穫し，

寸断したイモ類から多数のイモを収穫する文化が，その背後にはあった。蛇は穀霊であった。穀霊は，年に何度も脱皮して，死と再生を繰り返す蛇によって表象された。インドラの伝承は，龍脈をひらいて生命の水を得るという一種の風水思想である。しかし，ここには，ギルガメシュやアレクサンダー大王のように，不死を手に入れるチャンスに逃げられ，現し世に帰還するモチーフは見られない。

古代エジプト人は，ナイル川が流れ出す水源に，ハピという一対の神が住むと考えていた。ハピ神は，豊かな女性の胸をもった男性神で，一体は南エジプトを，一体は北エジプトを表わしていた。ナイル川はハピと呼ばれ，毎年の増水をハピの到来と称し，喜び合って盛んに祭りをした。ハピは豊穣の象徴であった。ハピは，アスワンで信仰された（三笠宮崇仁『古代エジプトの神々』日本放送出版協会，1988年，15－16頁）。ハピは神々の父と呼ばれ，アスワンのエレファンティネ島の洞穴の渦巻きの中から出現したあと，冥界を通り，天空を通り，エジプトを通って流れるといわれた。ハピはオシリスと同一祝され，その葬儀は，毎年，ナイル川の氾濫が最高に達したときに行われた。ハピは，鬚をつけた緑または青の男として表現され，垂れ下がる女性の胸をもっていた。ハピは，積み上げられた食物を載せた盆をもつ姿で，あるいは，壷から灌奠の水を注ぐ姿で表わされた（ヴェロニカ・イオンズ『エジプト神話』酒井伝六訳，青土社，1988年，207－210頁）。

ハピ神は，二神一組になった両性具有の豊穣神である。本来の姿は，男神と女神であったと考えられる。川の水源にあるトンネルの奥には，ウトナピシュティムと，ギルガメシュに不死の薬草を与えたウトナピシュティムの妻がいた。ハピ双神は，おそらくは，これらの夫婦神と同じものと考えられる。ハピ神がいる水の渦巻きは，蛇の象徴である。インドでは，蛇ヴリトラが，インドラによって寸断され，水に流された。それは，作物のエネルギーになった。ハピ神は，ナイルの洪水と共に死に，葬儀が行われた。ハピは，オシリスと同じように，寸断されて葬られたと考えられる。ハピはナイル川そのものであり，穀霊であった。ハピが手にする盆の上には，食物が満載されてい

る。壺から水を注ぐのは，水源を表し，生命の水の付与者でもある。

アレクサンダー大王が，生命の水を求めて，地下の川，つまり水脈，龍脈をさかのぼっていったとき，大王を導いたのは，緑の人ヒズルであった。ヒズルは老人の小人で，生命の水の管理者であった。ナイル川の水源の洞穴にいるハピ神は，緑あるいは青の水の精霊で，アレクサンダー大王を案内したヒズルであった。ハピは地下路を通ったというが，龍脈を通ったのである。ヒズルも龍脈を通ったのである。ヒズルも洞穴の向こうにいるウトナピシュティムであった。インドの蛇ヴリトラは，ハピやヒズルと同じものと考えられるが，かなりの変容を遂げている。

信州の諏訪神社の縁起を説く「甲賀三郎譚」は，諏訪の神人が語り歩いた物語であるが，南北朝期に成立した『神道集』に収められた「諏訪縁起の事」が書承としては最古である。原話はそれ以前からあったと思われるが，この安居院（あぐい）流の説教台本に載ったことでいよいよ広まり，お伽草子としての「諏訪の縁起」として，室町後期から近世にかけて，同趣の作品が多く出まわった（稲田浩二，大島建彦，川端豊彦，福田晃，三原幸久編『日本昔話事典』弘文堂，1977年，492－493頁、徳田和夫「諏訪縁起」）。「諏訪縁起の事」（「甲賀三郎譚」）は最古の書承であるが，最古の書承が必ずしも最良のものではなく，口承で伝えられたものの方が良いものがあるという考えがあるが（『定本　柳田國男集』第７巻「物語と語り物」36－65頁，甲賀三郎の物語）この「甲賀三郎」には，重要なモチーフが数多く含まれているので，大要を述べてみよう。

近江の甲賀郡の地頭，甲賀権守諏胤（ごんのかみよりたね）には３人の男子があった。いまわのときになり，末子の甲賀三郎諏方（よりかた）に家督を継がせ，太郎と次郎にはそれぞれ所領を与えた。甲賀三郎は，大和の春日姫と夫婦の契りを結んだ。あるとき，三郎は国中の武士を召し寄せ，伊吹山で１週間の巻狩を催した。太郎，次郎の兄も参加した。山の麓で，三郎の奥方春日姫は双紙類を楽しんでいたが，空から美しい双紙が三帖降ってきた。奥方がこれをとって見ていると，双紙が突然美男に変身し，奥方をさらって東北をさして逃げていった。

三郎は，国々の山を探したが，妻を見つけることができなかった。見落としていた蓼科山にゆくと，東北の隅に大きな楠の木があり，人間が入れるだけの人穴が開いていた。三郎は，武士たちに籠を吊り下ろしてもらって，降りていった。降りて見ると，東の方角にトンネルがあったが，日光剣を抜いて入っていったので，少しも暗くなかった。また，飽満食という双子を左脇に挟んでいたので，空腹にならなかった。4，5里進んだ所に野原があり，更に進むと池があった。極楽のように美しい景色であった。池を通り過ぎると9つのお堂があり，中に一丈六尺の阿弥陀如来の尊像が9体立っていた。そこを過ぎて御殿に達したが，千手経を読誦している奥方を見つけた。主人が不在だったので，奥方を穴の底まで連れていった。彼女は，大切な鏡を忘れてきたというので，三郎は鏡をとりに御殿に引き返した。

兄の次郎諏任は，よからぬ心をおこし，家来に命じて，姫を自分の館に連れ込んだ。そして，三郎の乳母の子宮内判官経方の首を刎ねて穴の中に投げ込み，一族20余人の首をさらし首にした。春日姫は次郎になびかないので，次郎は近江北岸戸隠山の麓で，彼女を斬らせることにした。しかし，たまたま通りかかった宮内判官経方の娘婿に助けられ，大和の祖父春日権守の許に帰された。春日権守は，甲賀次郎を誅し，その首を蓼科山の人穴の入口に懸けようとするが，姫のとりなしで思い止まる。

甲賀三郎が，鏡をとり戻して帰ってくると，穴の底は，人々の首と死骸の山である。もとの所に引き返し，一丈六尺の仏像に，日本に帰らせて下さいと懇願する。三郎は，73の人穴と72の国を遍歴する。途中，いつも野原や水や老人の描写がある。最後にゆきついた72番目の国は，70歳余りの好美翁が支配する維縵国であった。翁は毎日鹿狩りをしていた。三郎にいうには，この国が最後で，ここを出ると死出の山，三途の川，閻魔の国があるだけなので，少し休んでいって下さいと。三郎は，翁の3人の娘のうちの末娘維摩姫と結婚した。13年6か月が経ち，三郎は春日姫を思い出して泣く。維摩姫は，日本に三郎を送り，自分も神になって同道するという。途中，大きな野原を通り，毒蛇と蜈のいる契川を渡り，契原を越え，亡帰原，荒原庭に出る。そ

のあと，三郎は暗黒の中（トンネル）に入ったので，日光剣をかざして進む。

地上近くになると，藤がさかさに生えているのを見る。甲賀三郎は，ついに，浅間獄の麓に，父の供養のためにつくった釈迦堂に出た。たまたまそこにいた子供らが，蛇が出たといって手にした棒で打ったので，物陰に隠れた。夜になり，僧たちが堂にやってきて，三郎の父の伽話を始めた。三郎は，自分が甲賀三郎であると名乗り出るが，維縵国の衣服をつけているので，僧たちには蛇に見えた。一人の僧のことばに従い，石菖（せきしょう）の生えた池に入って出ると，人間の姿になった。三郎は，奈良三笠山に入り，春日姫と会い，兄たちとも和睦した。甲賀三郎は，諏訪上の宮に現れ，春日姫は，下の宮に現れた。維摩姫は，浅間大明神として現れた（『神道集』「諏訪縁起の事」，貴志正造訳，平凡社，1967年，238－292頁）。

諏訪縁起の「甲賀三郎譚」は，ユーラシア，アフリカ，米大陸に広く分布する「熊のジョン」の後半部とことに共通点が多い。「熊のジョン」には，地下に失跡した王女を探しにゆく話型があったり，二人の兄に裏切られたりする話型があるが，甲賀三郎の地下界72国の遍歴と地上への帰還の話で用いられたモチーフは，これらの物語には見られない。スペインの「熊のホアン」（ホアンは英語のジョンに同じ）の研究は，三原幸久「くまのホアン」『スペインの民族の昔話』（岩崎美術社，1969年，41－67頁。前掲『日本昔話事典』三原幸久「熊のジョン」）の中で詳しく分析されて論じられてる。福田晃『神道集説話の研究』（三弥井書店，1984年）は，諏訪縁起，「甲賀三郎譚」を研究，分析した最大のものであろう（87－458頁），同『神話の中世』（三弥井書店，1997年）にも諏訪縁起の分析と研究が見られる。これらの研究をもとにして，さらに比較を広げたいと思う。

蓼科山の東北の隅に楠の木があり，甲賀三郎は，その木の洞から地下界に入ってゆく。木の洞から異界に入ってゆく話が，中国の山東省にある。昔，大壮（ターチョワン）という若者がいた。一人前になったのに，まだ嫁さんがもらえなかった。あるとき，大壮がたきぎを取っていると，二人の若い女の声がした。一人は緑色の衣服をつけ，もう一人は赤い衣服をつけていた。二人の娘は，身軽に

崖をのぼって消えていった。数日して，大壮はあの赤い衣服をきた娘と話すようになり，娘はたきぎ取りを手伝った。娘は，緑の衣服をきた娘に呼ばれると，大壮にほほえみかけながら帰っていった。娘の話すところでは，娘の性は胡，名は二妮（アルニー）といい，緑の女は姉さんであるということだった。二妮は大壮の嫁さんになり，子供もでき，しあわせだった。

大壮はある日，二妮が一人の老人と話しているのを見た。近寄って認めようとしたら，老人の姿が見えなくなった。二妮は大壮に，父がきて自分を連れて帰るので，今日かぎりで，別れなくてはならないといった。二妮は大壮に，もし，私に会いたくなったら，ここから西南へ千里いった所に，万年たった槐（えんじゅ）の木があり，その木の根元に洞穴があるので，そこへたずねてくださいといった。二妮は，口の中から，豆粒よりちょっと大きい二つの珠を吐き出して大壮に与え，もし食べ物がなくなったら，この珠にたのめば，好きなものが食べられるといった。大壮があらためて二妮の方を見ると，彼女の姿はなく，一匹の赤い狐が足下にうずくまっていた。

大壮は指示された槐の木の根元にある洞穴から中へ入ってゆくと坂になっていた。真暗なトンネルを１日か２日歩きつづけると，突然，目の前が明るくなり，高い楼門が現れた。門環を打つと，姉の緑の娘が出てきた。娘は大壮を部屋に案内し，おんどるの上に横たわった狐を指さして，あれが二妮だといった。大壮は，袋の中から例の珠をとり出して，駆け寄ってきた狐の口の中に入れてやると，もとの二妮の姿にもどった。

そのとき，親狐の父親が外からもどってきた。そこで二妮は大壮に，父の出すご馳走は，どんなものも口にしてはいけないと注意した。父親というのは，白い顔の老人であった。大壮はうっかりして，父親の出した汁を飲んだが，そのとき，１本のうどんが，つるりと腹の中に入った。二妮は，それは毒蛇だから，それを殺さなければならないといい，親を酒に酔わせて眠らせ，口の中から珠を取り出し，どんぶりの水につけた。大壮がその水を飲むと，蛇の危害から逃れることができた。父親は，狐の姿になってしまった。二妮は，その珠を口に含み，大壮の手を引いて洞穴をぬけ出して，家に帰りつき，

幸せに暮らした（「狐の嫁さん」『山東民話集』飯倉照平，鈴木健之編訳，平凡社，1975年，112－124頁）。

甲賀三郎は，楠の木の洞から地下界に入るが，大壮は，槐の洞から入る。大壮は，赤い娘と緑の娘を見るが，赤い娘は，ギルガメシュが見た聖娼シドゥリにあたり，大壮を案内する緑の娘は，アレクサンダー大王を，地下のトンネルの奥にある生命の水の水源に導いた緑の人ヒズルにあたる。二人の娘の父親は老人で，ウトナピシュティムにあたるのであろう。蛇が出てくるが，永遠の生命を大壮から奪うために，彼の腹の中に入った。大壮はしかし，対抗策を講じて，蛇を殺す。『ギルガメシュ叙事詩』では，ギルガメシュがウトナピシュティムからもらった薬草を，蛇が食ってしまう。大壮の話では，大壮が，娘たちの父が出した汁を飲み，蛇が大壮の腹の中でそれを食う。父の出す食物は，不老不死の食物ではなく，死をもたらすかのような印象を与える食物である。おそらく，不死の食物が忌まれているあいだに，それと正反対の価値をもつ食物になったのであろう。

父の口の中の珠には，まだ本来の不死の薬のもつ霊力が宿っていた。そこで，珠を浸した水で蛇の害を防いだのである。父は，ウトナピシュティムの面影を保っている。大壮が訪れた世界は，祖先獣の世界であった。大壮は，祖先の国を訪問したが，娘たちの忠告と助力で，祖先の国にそのまま止まらないで，現し世に帰ることができた。大壮は，よみがえったのであった。父親と赤の娘は，狐の姿をとるが，緑の娘は，人間の姿をとる。二人の娘は，別々の世界の者で，緑の娘は，この世とあの世の中間に立つ存在であった。大壮の話には川のモチーフはないが，木の洞から地脈を通ってゆくので，そこには川が流れていることは，暗黙の諒解があったと考えられる。

日本にも，古木の洞に関する話がある。昔，右頬にこぶがついた翁がいた。山にいって薪をとって暮らしていた。あるとき，風雨がひどくなったので，古木の空洞に入って雨宿りをした。すると，人のけはいがしたので，生き返った思いがした。よく見ると，いろんな姿の鬼が百人ほどいて，赤いからだの者は青い衣服をつけ，黒いからだの者は赤い下ばきをつけていた。酒盛りが

酣になり，鬼たちが舞い始めた。翁は，空洞から走り出て，踊りまわった。鬼たちは，面白がった。

主人の鬼がいった。永年，このような遊びをしてきたが，こんなことは初めてだ。爺さん，こんども，きっと来なさい，と。鬼たちは，質をとっておこうといって，右頬のこぶをねじり取った。そして，かならず次の遊びにも来なさいといった。翁は家に帰り，妻にこのことを話した。

隣に，左頬にこぶのある翁がいた。これを聞いて，山の木の洞に入っていると，鬼たちの宴会が始まったので，洞から出て踊ったが，上手に踊れなかったので，主人の鬼が，今回は下手だ。質を返すから，もう結構，というと，鬼たちが質にとったこぶを翁の右頬に投げつけた。隣の翁は，両頬にこぶがついた翁になってしまった（『宇治拾遺物語』巻１の３「鬼に瘻とらるる事」）。

こぶとり爺の話では，古木の空洞から直接鬼の世界に出る。地下に降りて，トンネルを通ることもない。川も出ない。鬼は，赤鬼と黒鬼（濃緑鬼）の二つであるが，腐敗し始めた死体の色を表わしている。鬼が身につけている衣服の色が青と赤であるのは，大壮の話で，二人の娘がつけている衣服の色が緑と赤であるのと同じである。鬼は祖霊の表象であるので，鬼が踊る広場は，あの世である。翁は，木の洞から広場へとび出して踊った。山のトンネルを抜けて，あの世に出たことを意味する。酒盛りの宴で，横座に座っていた鬼の主人が，これら百人の鬼の首長にあたる者で，彼の指示によって，翁は家に帰った。隣に住んでいる欲張りの爺さんあるいは婆さんが，真似をして失敗するのは，類型化して付加されたモチーフである。

祖先のいる異界を訪問して，こぶを質にして帰してもらったという話になっているが，もとは何らかの供物であった可能性がある。甲賀三郎の場合は，彼の乳母の息子の首や一族の首が穴の底に投げ込まれた。自分の肉体の一部を祖先に差し出すのは，自分があの世に参入させてもらうことを前提としている。しかし，あの世の首長の指示で，翁は現し世に戻ってきたのである。大壮の話では，大壮は死の一歩手前まで行ったが，間接的ではあるが，娘たちの父親の意向で，現し世に戻った。こぶとり爺の場合，爺を案内する緑の

人や爺と一緒に帰る赤い服の女はいないが，鬼の皮膚の色や衣服の色で，それを代表させている。

同じ系統に属する説話が『千夜一夜物語』にも見られる。天女と結婚したバスラのハサンは，二人の子供をもうけ幸福に暮らしていたが，留守中，妻は夫が隠しておいた羽衣を見つけ，もし自分に会いたいなら，ワク諸島に訪ねてくるようにといいのこし，子供を連れて天の実家に帰ってしまう。わが家に帰ってきたハサンは，これを知り，七つの谷，七つの海，七つの山を越えて，妻を訪ねてゆく決心をする。ハサンは，アブド・アル・カッドゥースという老人が連れてきた象に乗り，三日三晩進むと，青い山に到達した。麓に洞穴があり，老人はハサンの手を引いて中に入った。トンネルになった廊下を1マイルほど進むと，広場に出た。そこを出ると，老人は1頭の黒い馬を曳いてきた。黒馬に乗って砂漠を過ぎるとある洞穴に着いた。5日間，入口で待っていると，黒ずくめの白ひげを生やした老人が出てきた。老人は，ワク諸島を訪ねた者で，生きて帰った者はない。しかし，彼の地の長老に紹介状を書こうといってくれた。

長老の老人アブド・アル・ルワイシュは，ハサンを洞穴の奥に案内し，半日も進むと，大広間に出た。中央には木々が茂り，草花が咲き，果実のみのった花園がしつらえてあり，小鳥が枝に止まって，全能の神アッラーを讃えていた。ハサンは長老の指示で，ワク諸島の大王のもとにいたる。ハサンは，女子軍の総司令官の老女の案内で，女子軍が水浴するのを見せられたりするが，とうとう逃げた妻を発見し，彼女と子供を連れてバグダードに帰り着いた（バートン版，大場正史訳，河出書房，1967年，巻6，779－831夜）。

この物語でも，青や黒の表象，山，洞穴，トンネル，老人，一度訪れたら二度と生きて帰れない（死者の）国，そこの長老である老人，トンネルを出た所に出現するエデンの園，エバにあたる逃げた妻など，今まで挙げた多くの物語に見られたモチーフが現れる。さらに，ハサンがワク諸島に旅立つ前，ハサンは長い間家を空けていたので，ハサンの母は，ハサンが死んだものと信じて，屋敷内に彼と妻子の墓をつくっていた（796－797夜）。ハサンの話

には，ハサンが死んでから祖先の国ワク諸島を訪れ，そこで歓待されて帰宅するという，きわめて古い物語の型が伝承されている。ハサンは，あの世から妻子を連れて帰還する。つまり，よみがえったのであった。

仏典にも似た話がある。あるとき，緊那羅（きんなら）王の娘で悦意と呼ばれる天の鳥が池で水浴をしていると，一人の猟師が網で捕らえた。猟師は，彼女を自分のものにしようとしたが，彼女は，自分は王妃にしかならないという。そこで，猟師は悦意を，王国の太子善財童子に奉った。父王は，善財を戦場に送り，悦意を殺して，その脂で不老不死の薬をつくり，王位の安泰を手にしたい思う。悦意は王の手を逃れ，緊那羅王国に帰ってゆく。去るときに，彼女は指輪を仙人に渡し，善財が帰ってきて自分の行き先を尋ねたら，この指輪を渡し，次のように伝えて欲しいという。三つの黒い山を３回越え，さらに黒山に着くと山下に川が流れている。さらに山々を越え，佉那羅（きやなら）山に至ると，山下に洞穴がある。洞穴に入ると大石柱がある。柱の上に登り，鹿皮を身につけて待っていると，大鳥がきて，汝をつかんで，山々を飛び越えてゆくだろう。また洞穴があり，中には川が流れていて，大蛇が近づいてくるので，跳び越えよ。道を進むと，悪鬼の形相をした者が現れるので，額に鉄釘を打ち込め，と。

善財は戦場から帰り，妻悦意が去ったことを知り，緊那羅王国に彼女を訪ねてゆく。まず，猟師から彼女が水浴に飛来した池を聞き，そこに住む仙人を訪ねて彼女の言付けを教わる。緊那羅城は，樹木が茂り，草花が咲き乱れ，諸鳥が啼き，水が流れ，無数の緊那羅女が水浴していた。善財は，指輪を悦意の侍女が運ぶ桶の中に入れる。悦意は夫の善財が自分を訪ねてきたことを知り，父王に紹介する。父王は，千人の緊那羅女を悦意と同じように着飾らせ，どれが悦意であるか，あてさせる。善財は悦意を手に入れ，二人して父王の城に帰り，子細を報告する。父王は善財と悦意の超能力を知り，善財に灌頂して王位につかせた（義浄訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻第13－巻第14，『大正蔵』第24巻，律部３，57－69頁）。

善財童子が訪ねてゆく緊那羅国は，幾重にも重なった黒山のかなたにある。

山の下の洞穴の中には水が流れているので，龍脈の伝承が生きている。洞穴の中に大石柱があるという話は，今までの説話には見られなかった。石柱の元の形は，樹木であろう。樹木なら，洞穴の入口にある例は，いくつもある。鹿皮などを被って動物に変身し，巨鳥に運ばれるモチーフは広く見られる。獣皮を被り，巨鳥をおびき寄せる観があるが，古い考えでは，自分の祖先獣の姿になって，妻の鳥の世界へ参入しようとしたのである。洞穴の向こうに立つのは，老人というよりは，悪鬼の形相をした者で，これ以上の進入を阻んだのであろう。善財は退去することなく，さらに前進した。鬼の額に釘を打ち込んだとあるが，これは，鬼を殺すためではなく，鬼の霊威を散逸させないための魂鎮めである。この鬼は，もとは祖先の代表であった。こぶとり爺が出会った鬼も祖先であった。山々を越え，洞穴と川をさかのぼった向うにある緊那羅城は，エデンの園であった。蛇はエデンの園である緊那羅城にはおらず，途中の川の中にいる。

バラスのハサンは，ワク諸島の女子軍が一糸もまとわずに水浴するのを，司令官の老女の案内で見せてもらう。これだけなら，アラビアン・ナイトだからといい切ることもできるが，ハサンは，女子軍の一人一人をつぶさに観察しながら，妻がいないかどうか確かめている。善財童子の場合は，緊那羅城の池で，娘たちが水浴しているばかりでなく，悦意に似た女千人に同じ服装をさせ，その中から，本当の悦意を選ばさせられている。これは，日本の難題聟入り話に，三人ある娘に同じ衣裳を着せて並べて，どれがお前にやる娘かあてて見よというのがあるのと同じもので，源三位頼政あるいは源太景季の逸話と伝えられる「いずれあやめ」と同じ話である（『定本　柳田國男集』第6巻，筑摩書房，256－257頁）。

『源平盛衰記』のこの種の話は，世界的に見られるが，ソロモン王とシェバの女王の間に交わされた難題解きにもそれが見られる。シェバの女王は，ソロモンの名声を聞き，大勢の随員を伴い，香料，金，宝石を駱駝に積んで，エルサレムに来た。彼女は質問を浴びせたが，ソロモンは，その全てに解答を与えた（「列王記」上，10.1－3）。聖書には，どのような難問であったの

か記載はないが，後の『ミドラシュ』などには伝えられている。女王は，同じ身長で，同じ身なりの男女を何人も出して，男女を見分けよといった。ソロモンは，宦官にいいつけて，胡桃などの食物をもってこさせる。すすめられると，男は手を出してわし摑みにする。女は，手袋をはめたまま，つつましやかに受ける。それでソロモンは，これが男，あれが女だと答える（別所梅之助『聖書民俗考』警醒社，1933年〈有明書房，1975年復刊〉，342－343頁）。

甲賀三郎に戻ろう。三郎が，地下のトンネルを進むと，野原があり極楽のようであった。そこを過ぎると，一丈六尺の仏像があった。ギルガメシュの場合の，不死のウトナピシュティムにあたるのが，この仏像である。さらに進むと，妻を見つける。バスラのハサンや善財童子の場合は，逃げた妻を追って，山と洞穴を経たのち，エデンの園に到達し，妻を連れて帰宅する。甲賀三郎は，妻を穴の下まで運ぶが，妻だけが先に地上に引き上げられ，三郎は，地下72国を巡ったあと，地上に出て妻と結ばれる。維縵国の王好美翁は，三郎を日本へ送り返す。三郎は，この最後の国で，維摩姫と結婚している。維縵国は，龍宮で，蛇（龍）の国であった。甲賀三郎が地上に出たときは，蛇の姿をしていた。甲賀三郎は，73の地脈を通ったが，蛇の姿で通過したと考えてもよい。72の国々は，全て祖先の国で，ことに維縵国はもっとも親しい祖先の国であった。蛇は祖先であったにちがいない。甲賀三郎の話でも，他の物語と同じモチーフが用いられ，話が独自に展開している。山，木の洞，トンネル，野原，庭，極楽，老人，川，池，人間の供犠，地下界の王女との結婚，蛇など，あらゆるモチーフが，これらの物語に用いられてきた。

現代では，調査班や探検部のメンバーによって，地下洞や鍾乳洞の奥深くまで探査されるようになったが，先史時代から，地下洞を下って，そこに水流を見れば，それが行きつく先は，暗黒の湖や海であることは，容易に想像されたであろう。入口が横穴式になっていて，水流がある場合，それは，地上の川となって海に流れ去る。このような場合，洞穴には，地上の川と地下の川の両方がある。地下の川と地上の川は，死の世界と生の世界の川である

が，地上の川は，地下の川の反映とも考えられる。地下は，地脈を通じて，次々と広場や楽園がつながる。甲賀三郎の場合は，72国が独立して存在し，最後の72番目の維縵国で地下国は終わり，山や川をへて人の世につながる。この場合も，トンネルを通ってゆくことになる。

ロルフ・スタン『盆栽の宇宙誌』（福井文雅，明神洋一訳，せりか書房，1985年）にいう。このようなトンネルを通った者は，別世界に達する。この理想郷は，何ら欠けることのない至福の地で，仙人の隠れひそむ洞窟である。仙人の住む場所が洞天，つまり洞窟にできた天，自然，天地と呼ばれる。洞天には，10の大洞天と，36の小洞天と72の福地がある。なんら不足のないこの天地は，洞庭湖や聖地などの有名な景観にいつも見出される。洞窟は，互いに地下でつながっており，道教徒は，一方から他方へと自由に行き来することができる（84－85頁）。72の福地は，甲賀三郎が遍歴した国を想起させる。仙人というのが老人にあたる。ここでは，甲賀三郎の遍歴やギルガメシュの不死の国探訪の文学は見られないが，仙境として洞天が存在することが描かれている。スタンは，比較の立場をとらないので，拡がりがない。

澤田瑞穂『中国の伝承と説話』（研文出版，1988年）にいう。杜甫の有名な詩のせいか，洞庭と聞けば，湖南省岳州の洞庭湖のことだと考える。しかし，本来の洞庭は，それよりずっと東の，江蘇の太湖に臨む苞山（ほうざん）（包山）にあった洞穴に由来した名で，湖には関係しても，湖の固有の名称ではなかったらしい。洞とは洞穴のことで，庭とは，地下の巨大な鍾乳洞の奇岩，怪石，岩窟，湧泉，懸瀑から成る一種の庭園で，洞中地下庭園のことである。これは人間の住む所ではなく，神仙道士の住む仙洞を表わしたもので，上古人の穴居生活を復元したものであろう。それでは，江蘇の洞庭が，なぜ西方の巴陵にも冠せられるようになったのか。それは，太湖苞山の洞穴が，地下を潜行して，西の岳州にまで及んでいると考えられたからである。太湖と洞庭湖とは，地脈によって結ばれており，太湖は原初の洞庭湖であった（「口碑拾遺」洞庭地道）。

澤田も比較の立場に立っていないが，洞庭という概念をよく説明している。

ただ，洞庭を神仙の住居としたのはよいが，先史時代の穴居の跡と考えたのは，どうかと思う。桃源郷は洞庭であり，甲賀三郎が訪れた72国は，みな洞庭であった。地下の国に池や湖や海があるかないかは，それぞれの伝承による。地上に聖化された湖や池がある場合，水底に地脈が走っていると，逆に考えられるようになったのである。そこで，洞庭湖といっても，それは観念上の地下湖で，実際は地上湖なのである。中国その他の国の地誌で，山上の池や岩磐の凹みにいる魚は，山下を流れる川から水脈を伝って入ってきたという記述があるが，隣の山の池も，底は互いにつながっていて，魚は往き来していると考えられていた。

上来列挙してきた多くの物語には，ある種の共通点があることに気がつく。それは，一度死んだ人あるいは瀕死の状態に陥った人が，あの世を訪れ，再びこの世に帰ってきて，自分の体験を語る話の筋に似ている点である。カール・ベッカー（別華　薫，京都大学）は，このような臨死体験を整理している。(1)トンネルの体験　昭和60年10月21日，歌手のフランク永井氏が首吊り自殺を図って，蘇生したあと，丹波哲郎氏に語った話の中に，暗いトンネル，柔らかい光，花園，三途の川が出てくる。永井氏によると，氏の幽体は，暗い穴のようなトンネルに吸い込まれていった。(2)花園の体験　中岡俊哉氏は，終戦後５年間中国大陸に残ったが，ある日，火薬を積んだ車が大爆発を起こした結果，12時間死の世界をさまよった。そこは美しい花園で，橋のかかった川があり，渡ろうとすると，亡くなったはずの伯父たちに，渡るなといわれ，追いかけられ，この世に生き返った。

(3)三途の川の体験　会社員増田氏は，小学３年生のとき，練炭こたつの中で眠り込んだ。気が付くと，大勢の人が川を渡っている光景の前に立っていた。自分も渡ろうとすると，番人に，お前は帰れといわれた。怖くなった増田少年は，必死に走って逃げた。上空にある穴のようなものから，多くの顔がのぞいていた。彼の両親が医者を呼んで，みんなが彼を見下ろしていたのであった。彼は一酸化炭素中毒にかかっていた。(4)死者との出会い　Ｎ君は，スクールバスを降りた直後に，車に撥ねられ，半年近く，意識不明で入院し

た。N君によると，彼は3回ほど，暗いトンネルから長い川に出て，船でその川をさかのぼり，向こう岸の花園で遊ぼうとした。しかし，船を降りて花園で遊ぼうとするたびに，一人のお婆さんに叱られ，帰れ，帰れといわれた。そのたびに捕まり，3回も川を下るはめになった。そして，長い間，暗いトンネルで待たされた挙句，N君はようやく意識を回復した。N君の話すお婆さんの素振りが，彼女の祖母に似ていたので，N君の母親は，N君が覚えているはずもない彼女の祖母の写真を見せたところ，この人だといった。N君は，曽祖母とあの世で会ったのである。

(5)人生に対する反省　交通事故に遇った人の臨死体験によると，灰色の雲の中にいて，その中心に開いた真暗な穴の中へ引きずり込まれ，体が凍るほど寒かった。彼は，2歳のころからそのときまでの，さまざまなことを思い出した。多くは楽しい思い出でなく，悪い思い出であった。その後，花が咲き，太陽のように強い光が最大になったときに，彼の意識が戻った。それは，事故から3日目のことであった。自らの人生を顧み，善悪を反省するというのは，往生体験の中に多く見られる。なお，最後の審判を期待するキリスト教国では，この分野の研究は，かつて否定されたこともあったが，あまりに多くの体験が報告されているので，最近では，教会側も否定できなくなっている。キリスト教では，天国に行く者はわずかで，大部分は煉獄ないし地獄に行くとされていたからである。

(6)菩薩との出会い　青森県の田沢ヤスさんは，入院後2日目に死亡した。彼女は，自分の死体が運び出されるのを見たが，それはだんだん小さくなり，最後には見えなくなった。次に，三途の川のような川の岸を歩いていると祖父母に出会う。来るんじゃない，といわれて川を渡るのを止めた。しばらく川岸を歩いてゆくうちに，炎のようなものの上を歩いていたが，足を滑らせた。そのとき，菩薩さまが，あなたにもう一度命を授けよう，といって手をさしのべてくれた。(7)気分の高揚あるいは病気の治癒　重病を煩った際に，一時的にあの世を見て，よみがえったあとに，病気になる以前よりは健康になる人々の例。

(8)地獄の体験　天平16年（744），行基と智光は，僧として競い合っていたが，11月に行基が大僧正に任命された。ショックを受けた智光は，下痢をおこし，１か月後に死亡した。死ぬ間際に，智光は弟子たちに，９日間は死体を火葬にしないように命じた。この９日間のうちに，智光は地獄を巡った。地獄には，行基が死後に住むことになっている黄金の御殿と，その北側に智光が罰を受ける場所があった。智光はここで，９日間厳しい罰を受け，現世に戻されて行基に出合った。智光は，地獄での体験の一部始終を行基に話し，彼に懺悔した。これ以後，両者は教化に励んだ（『日本霊異記』中，第７）。

このような臨死体験がなされる理由について，アメリカ医学のデータから，ベッカー氏はその原因を探っている。(1)脳が酸素不足になるから，(2)脳内エンドルフィンがよけいに発生したために幻を見るため，(3)麻酔薬を使用するため，(4)高熱を発するために，幻を見るのではないかと疑ってみたが，ほとんど無関係で，かえって逆比例であることを確認した。麻酔をかければかけるほど，このような経験はしなくなる。高熱であればあるほど，臨死体験は起こらない。脳が酸素不足のとき，場合によっては，トンネルを体験することはあるようだが，それ以上のことはない。エンドルフィンの研究は，まだ不十分であるが，いずれも，医学で説明されたものでもないらしい（『仏教』11号「現代の往生体験―死後の世界の証言―」法蔵館，1990年，140－148頁。『AZ』16号「臨死体験の謎」新人物往来社，1991年，26－32頁）。

ベッカー氏が挙げる臨死体験が，まとまった形で，あるいは，その中の二，三が強調されて，いわゆる冥界訪問の文学のモチーフとして，古今東西にわたって用いられていることが分かる。このような体験は，人類が発生して以来の共通体験であるので，人類最古の文明であるシュメール文学に，すでにそれが見られるのである。『日本霊異記』や『今昔物語集』をはじめ，『三宝絵詞』（『大日本仏教全書』111），『日本往生極楽記』（同107），『私聚百因縁集』（同148），『本朝法華験記』（『続群書類従』八上）などの仏教説話集に見られる，死後の冥界訪問とこの世への帰還の物語は，死と死後の世界にこだわった仏教と仏教徒の臨死体験の記録である。死の世界を想像するのは，仏

教徒だけではなかった。人類があの世に関心をもつようになると，臨死体験をしたとき，それが説話や文学に発展するのは当然考えられることである。

もっと具体的な例を挙げておこう。立花隆氏は『証言・臨死体験』（文藝春秋，1996年）の中で，臨死体験をした知名人の体験談を集めている。社会的に信用のある人たちのことばであるので，著者も安心して記録することができたと思う。作家水上勉氏は，心筋梗塞の発作を起こして，３日間昏睡状態に陥り，家人が葬式の準備を始めたときに，目覚めた。氏の体験は，三途の川のような所から始まるが，お花畑はなかった。後ろから，30年前に死んだ父親らしい人の声がして，ここは冥土だから気を付けろといっているようだった。ちょうど同じ時期に心筋梗塞になった70ぐらいの京都の芸妓は，お花畑を見たと氏に電話をしてきたという（22頁，26頁）。狭心症の発作で，心停止状態になった芸能レポーターの前田忠明氏によると，まるで車に乗って長いトンネルを行くみたいな感じて，前方に明るい光が見え，それがだんだん大きくなって，一挙に光の世界が開いた。それはすばらしい景色で，目の前には川があり，川の向こうには，美しいお花畑があった（46－48頁）。

脳溢血におそわれた作家の永倉万治氏によると，海辺のような所に，漁師のような男が立っていて，来いよ，と招いたので，行くよ，といいながら，そちらに行かなかった。氏は夢を見るが，それは，海の底をもぐっているようであり，そこに必ず玉が何個も重なって現れた。玉は，氏が生まれてくる以前の記憶ではないかと思われるものであったという。氏が意識が回復したあと，家での生活に慣れるため，初めて家に一泊したとき，庭のヒマラヤ杉に顔があり，しゃべったり歌ったりするように見えた。立花氏によると，アメリカの取材でも，全ての植物が，生きもののようになったという人に会ったという（85－88頁）。

上腸間膜動脈性十二指腸閉塞で死線をさまよった，彗星探索家木内鶴彦氏によると，まっ暗なぬかるみの中を這いずりまわっている感じで，向こうに小さな明かりが見えたので，そこに向かって，トンネルのような所を這って行った。トンネルを出ると川があり，舟がつないであり，向こう岸に渡ると，

一人のお婆さんが現れた。地平線が無限に拡がり，お花畑には，色とりどりの花が一面に咲いていた。氏の意識は体外離脱し，ベッドの側で付き添っている父親の中に入り，父親の目線でものを見ていた（98－101頁）。

咽頭炎をこじらせ，敗血症，急性腎不全を併発した際に臨死体験をした，元プロレスラー大仁田厚氏は，若い者を沢山つれてスナックに行くが，トイレに行きたくなって，裏口を開くと，川があり，船があったので，それに乗った。氏は，枯れた草原地帯に出て，羊を飼っている，55－6歳のロシア人風のおばさんにインタビューしていた。それから急に場面が変わり，まっ黄色なお花畑が出現した。まん中に一本の道があり，その道を進んでゆくと，後ろから，大仁田さん仕事ですよ，と引き止められた。仕事はシベリアの雪の中だった。巨大な熊が立ちはだかったので，大仁田氏は立ち向かった。熊に一撃を加えられ，氏は意識を回復した（118－125頁）。

その他の臨死体験者も，同じような証言をしていて，意識が体外離脱し，トンネルに吸い込まれたり，赤や黄色の花の咲く野原を進んで行くと，後ろから呼び戻す声がしたり，向こう岸のお花畑に一人の老人が座っていて，太陽も出ていないのに，燦々と輝いていたとか，立花氏の質問に答えている。

黄泉の国に帰り，黄泉の国から帰還して蘇る行事は，この世につくった黄泉の国である神殿に参詣し，神殿の外である現し世に戻ることで実修された。古代エジプトは，まん中を流れるナイル川によって二分され，東半分は生者の国，西半分は死者の国とされた。生者の国で死んだ者の遺体はミイラにされ，船に乗せられてナイル川を渡り，西岸に着いたあと埋葬された。

ギザに残る三大ピラミッドのうち，まん中のカフラー王のピラミッドの前に葬祭殿があり，そこからナイル川岸の河岸神殿まで，幅4.57メートル，長さ494.60メートルの通路があった。通路は，現在は敷き石だけが残っているが，屋根のついたトンネル状のものが復原されている。通路は河岸神殿から登りになって葬祭殿に至る。葬祭殿の前殿は，河岸神殿とほぼ同じ構造で，二つの広間があった。第二の広間から後殿に入るが，そこは屋根のない大中庭で，中庭の奥の壁龕には，王の像が安置してあった。河岸神殿には二つの

入口があり，北側の入口には，スフィンクスがあり，それは現在も見られる。カフラー王のピラミッド複合は，もちろんカフラー王に所属する。私人の墳墓も数多く発掘されているが，カフラー王墓の複合に優るものはない（杉勇，屋形禎亮『エジプト美術』大系世界の美術３，学研，1972年，112－119頁）。

ナイル川，船，トンネル，広場，祖先像のモチーフが，カフラー王墓複合の中に見られる。毎年，ナイル川が洪水を起こした時期，河岸神殿と入口のスフィンクスの足許まで，洪水が押し寄せたであろう。人々は，ゆるやかな丘陵につくられた，500メートル近いトンネルを進んだ。最初の使用は，カフラー王の遺体を運ぶためであった。以後は，参詣者が通り，帰還するときに用いられた。河岸神殿には，聖なる動物とされた祖先獣のスフィンクスが，あの世の境界である入口に安置されたが，内部では，聖娼が，聖域参入者と契ったであろう。参入者は，上り坂のトンネルの中に吸い込まれ，かすかな光を天井の石の継ぎ目あるいは前方に見て前進すると，葬祭殿の前殿の二つの広間に達した。

第二の広間を出ると，太陽光の下，色とりどりの草花が咲き乱れる中庭に出た。庭の奥の壁龕には，祖霊を表わす王の像が立っていた。生きた参詣者は，これ以上，死の世界に進むことをしないで，トンネルを通って河岸神殿に戻り，ナイル川を渡って生者の世界に帰還した。つまり，よみがえったのである。因みに，王の像の後ろにある葬祭殿の西端の石壁は，ピラミッドに面するが，そこには偽りの扉が彫られ，あの世との最後の境界とされた。ピラミッドへの通路は，葬祭殿の北にあった。偽りの扉は，日本家屋の西の部屋に設けられた床の間の掛け軸の位置にあたり，西方の神仏の国への出口とされた。現在でも，葬式の出棺は，この場所の壁を破って行う場合がある。紀元前三千年紀中葉のカフラー王の王墓複合は，その根本には，臨死体験があったと考えられる。

ヘロドトスの『歴史』が伝えるランプシニトス王（前13世紀のラムセス二世，あるいは前12世紀のラムセス三世）の冥界下りは，その簡略版であろう。ランプシニトスは，地下の冥界に生きながら下り，そこで大地母神デメテル

（ヘロドトスは，エジプトの神々をギリシアの相当神名で呼ぶ）と骰子（さい）を争い，女神から黄金の手巾を土産にもらい，地上に帰ったという。ヘロドトスの時代（前5世紀）でも，これを縁起とする祭りが行われていた。祭りの当日，祭司たちは（忌み）衣を一着織り上げ，一人の祭司に目隠しをし，その衣を着せて，デメテル神殿に通じる道に連れてゆき，自分たちは引き上げる。目隠しされた祭司は，二匹の狼に導かれて，3.5キロ離れたデメテル神殿にゆき，また狼に導かれて元の所に帰ってくる（2.122）。

ランプシニトスは，トンネルを通って冥界に下り，死者の世界の女王である豊穣の女神デメテルに接する。女神とサイコロで生死を争い，ランプシニトスは生還する。これが，エジプトのよみがえり儀礼であった。金のハンケチをもらって帰ったというのは，多くの文化で葬儀の参会者が，死者の着衣を象徴する布切れをもらって帰ることと関係がある。日本では，参列者はハンケチをもらう。あるいは，中陰明けに，タオルや毛布などを贈られる。死者の身につけていた衣服には，ある種の霊威が内在するとされたので，死者の形見として，本来の意味のお裾分けに与ったのである。ピラト総督の兵士たちは，処刑されるイエスの前で，くじを引いて彼の衣服の部分を争った（「マタイ伝」27.35他）。ランプシニトスが，黄金の手巾をもらって帰ったというのは，死の世界の豊穣の女神から，その着衣の一部をもらって地上に帰ったことを意味していた。

ヘロドトスの時代は，冥界下りは，儀礼として地上で行われた。多くの祭司の中から一人の祭司が選ばれた。彼はランプシニトスの再現であった。祭司は，死者が着る忌み衣を身に着け，トンネルを通る代わりに，目隠しをしてデメテル神殿を往還する。二匹の狼とは，狼の扮装をした人間のことで，祖先獣を象徴していた。選ばれた祭司は，ランプシニトスを象徴したが，それは同時に，死にゆく神と再生する神を象徴した。祭司は，神として死に，再生するのであった。神は，エジプト人民の一切の穢れを引き受け，人民の再生のためにも死んでいった。人民の罪・穢れをあの世の豊穣と交換し，王（神）は再生するのであった。王（神）の死と再生は，人間の臨死体験と重

なる所がある。

3世紀ごろから，日本では前方後円墳あるいは前方後方墳が見られるようになる。古くは，前方部も後円部も，三段築成あるいは五段築成のような，階段型ピラミッドであった。周濠に囲まれた巨大古墳の場合，遺体は，前方部の基底部に向かって，濠の上を船で運ばれた。濠に降りる地点には，拝所と鳥居があるので，そこが，この世とあの世の境界とされてきたのである。遺体は，濠を渡った船から降ろされ，前方部の基底部に引き上げられた。そこから，遺体は，後円部の頂上に向かって，数十メートルのゆるやかな坂を上ってゆき，竪穴に収められたのであろう。前方部の基底部では，何らかの進入の儀礼がいとなまれたであろう。そこから後円部の縁辺までは，萱葺きのトンネルになっていたのではなかろうか。あるいは，トンネルになっていなければ，遺体上に天蓋を差し掛けながら進んだのであろう。いずれにしても，太陽光の直接の照射を避けて，冥界に参入したからである。

カフラー王墓と日本の前方後円墳の間には，その空間的隔りばかりか，二千数百年の隔りがある。しかし，両者の構造は同じであることは驚きである。濠はナイル川にあたる。河岸神殿にあたるものが，前方部の基底部にあったかどうか，私は知らない。そこから後円部までの上り道は，カフラー王墓の参詣道であるトンネルにあたる。後円部（後方部）が，カフラー王のピラミッドにあたる。ピラミッドの石材を積み上げるために，ナイル川に向かって，ゆるい傾斜の坂をつくり，上流から運搬された石材をコロを利用してピラミッドの所まで運び上げた。人工の坂は，ピラミッド完成後撤去され，その場所にトンネルの通路がつくられた。日本の前方後円墳の前方部は，ピラミッドとナイル川の間につくられた，人工の坂にあたる。この坂は，ピラミッドが積み上げられるごとに，背が高くなった。しかし，日本の前方後円墳の場合，坂は撤去されない形式がとられたので，前方部が付いた形になったと考えられる。

冥界に至る道筋は，古今東西の人による，殆ど同一と思われる臨死体験によって描かれ，その描写は，一方では説話や伝説になり，一方では，描写にのっとって設計された墓や神殿となった。

Stories Told by the Men of Near-Death Experience

Eiichi IMOTO

A man who has had a near-death experience tells us; he passed through a dark, long tunnel at the end of which a dim light was seen; before entering or leaving the tunnel he saw a river or Styx, a flower garden or a vast field, an old man standing there, and a young girl leading him (the man of near-death experience); he saw a sacred prostitute at the entrance of the tunnel; the old man gave him instruction to go back home or someone from behind called him to go home and get his work done.

King Gilgamesh of the Sumero-Akkadian Epos passed through a pitch-dark, long tunnel to see Utnapishtim in order to get an eternal life; Utnapishtim persuaded him to go home though giving him a present of herbs; on his way home from Utnapistim's land a snake stole his herb and got an eternal life for itself.

Adam and Eve left the Garden of Eden after eating fruit given by the snake: from Eden a river streamed out from something like the grotto of Pan forking into four rivers; in the times of paganism Adam was Gilgamesh and Eve was a sacred prostitute and the god was Utnapishtim.

A Chinese fisherman after sailing upstream found a tunnel at the source of the river in the forest of peach trees in full blossom; he

walked into the tunnel and got out of it to find a utopia; an old man told him of the history of the utopia; the fishrman returned home never to come again and find it.

Koga Saburo of Japan went through 73 subterranean tunnels and 72 countries; he saw many rivers, gardens, old men (a Buddhist statue), young girls and ancesters; eventually he appeared on the ground transformed into a snake.